

士の採品は乾燥地に生じた変形の一極端とみるべきもので、植物体も葉もより短小で、その割合に肋は長く突出し、葉の上縁の鋸歯明瞭で葉細胞も密な点から、変種コテリハリガネゴケとして区別することにした。

以上のいきさつを考えれば本種は当然野口教授との共同命名とすべきものであろう。しかし *calicicola* とか *calcareum* といった名称は later homonym で使えず、又他に本種の特徴を表わすのにふさわしい適当な名称もない（例えば光沢の著しいことを表わす名称もすでに多く用いられている）ので結局本種に属せしむべき一品を初めて記載された同教授を記念して種名を決定し筆者単独の命名で発表することにした次第である。敢て本種発表にいたるまでのいきさつをのべて同教授の御好意に謝したい。

終りにのぞみ種々御便宜を与えられ、あるいは標本を惠贈された各位に深謝の意を表する。
(昭和 31 年 10 月)

○カワノリ三重県に産す (瀬木 紀男) Toshio SEGI: *Parasiola japonica*
Yatabe found in Mie Prefecture.

本種はかつて不連続分布の植物として注目され、その産地に就いて屢々興味ある問題となつてゐたものである。然し近年になつて、小清水卓二博士は 1951 年奈良県大台ヶ原山麓本沢川にも産することを発見され、其後 1954 年矢頭猷一氏は岐阜県揖斐郡久瀬村小津川に産する事を報ぜられたが、今般三重県にも新しく産する事が判明した。

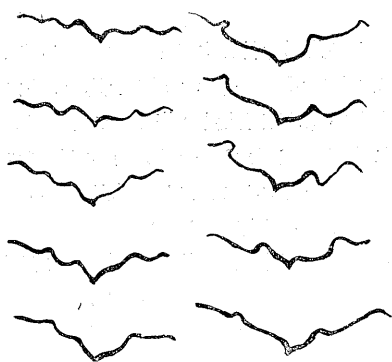
昭和 31 年 9 月 5 日、三輪勇四郎博士及び寺本一郎氏の持参された標品、及び 9 月 7 日筆者が三重県員弁郡白瀬村高知の谷の員弁川に注ぐ溪流中に於いて採集したものを檢べた処、カワノリ *Parasiola japonica* Yatabe に酷似し、現在の処では恐らく同種であらうと思惟される。然し疑点も少しく存し、詳細な点は目下検討中で後日決定したい。

(三重県立大学水産学部)

○ハマカンゾウの分布私見 (久内 清孝) Kiyotaka HISAUCHI: The distribution of *Hemerocallis littorea* Makino.

昨年相州葉山長者崎からもつて来たハマカンゾウが開花期に達したと見え本年 8 月中旬から咲き出して、9 月になつてもまだ咲きつづけているので、一応かんさつして見たところ地中に細い走茎を發して新株を發生する。根には紡錘状の球塊をつくる、その色淡黄褐色。葉は大形のものでは長さ約 90cm 巾最広部で約 4cm、老葉では数条の脈が

隆起し、断面は特異の曲線(図参照)を示す、もつともこれはこの属に共通の性質だがハマカンゾウに於ては著しい、また、葉色は緑色であつて、灰緑色には見えない。花茎

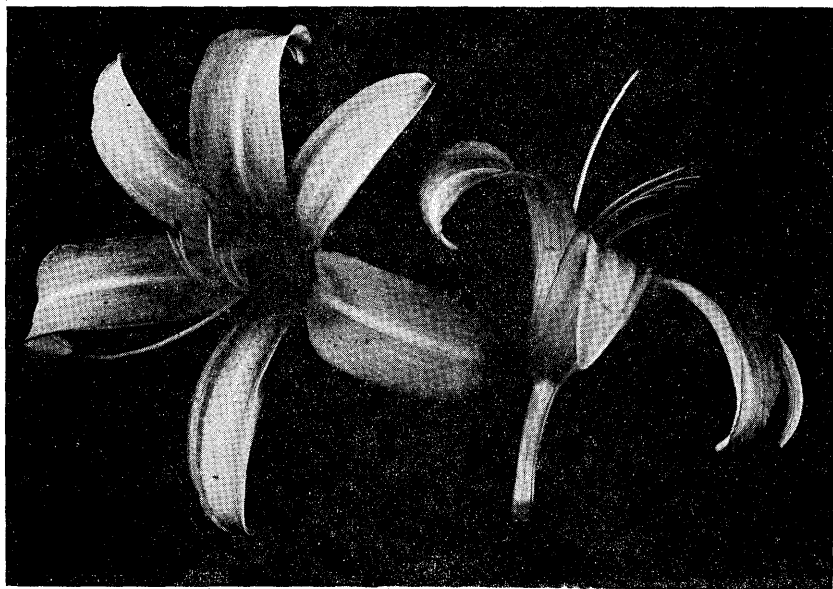


葉の断面(左)男鹿産(右)葉山長者崎産
Cross sections of middle part of leaves
of *Hemerocallis littorea* (left) Plant from
Oga. (right) Plant from Chojagasaki,
Sagami.

はやや灰緑色のように見える。そうして、上部では多少え字形に発達する傾向があり、下部の断面は鈍三角形であるが、上部にいたるにしたがい副稜線の発達につれて表面に細い数条の稜が見られ高さ約70cmにも達するが、小株のものは40cm内外である、大形のものには、長さ10cm内外の葉2-3枚をつけるが上部にいたるにしたがい順次小形になり、その腋から長さ3-15cmの花枝を互生する。花枝数は通常1個であるが下部で分枝して同一節に2個を生ずることもある。花枝の先端は小株のものでは単一であるが、大株のものは2又して何れも数花をつける。花下の苞は広卵

形で緑色、辺縁は膜質で無色。また、秋末花後にはこれが花枝として発達しないで、数葉片を有する芽枝として發育することもある。かかる場合には一見肉芽から発達したようにも見られるが、しかし、これは疑いもなく花枝が花に代り葉だけを帯びた枝に変つただけのことであるから、この現象は広く見ればことさら特長としてとりあげる必要もないが、しかしそのようなことをする傾向のあることは見のがせない。花は径約13cm筒部2.5cm、色は橙黄色で各片の中肋の両側には暗褐色の色彩があり内花蓋片に著しく、外花蓋片に少ない、つまり内花蓋では外花蓋よりも暗褐色の色彩がこい、内外片とも長さ9cm巾2cmでそり反り、辺縁部はやや内巻する、もつともそのことはこの類では当然のことである。余はかつて秋田県男鹿半島でカンゾウをとり神奈川県葉山長者崎で見つけたものと同一条件下で栽培してこれを比較しているのであるが、これを葉山の長者崎からもつてきたものと比べて見ても凡眼ではこの両者の間に異同を区別すること不可能であるので、これ等を同一種と考える。そこで思い出すことは牧野先生が實際園芸26巻3号(1940)にのせられた園芸植物瑣談中にかかれたことをふえんしてかかれた植物一日一題中の記事である。ここで先生は日本の特産ハマクワンゾウなる題下に「広く太平洋、日本海の沿岸に分布して生じているから、中国でも四国でもまた九州でも常に瀕海の崖で見られる。薩州甌島に生ずる萱草も多分このハマクワンゾウに外ならないであろう」と述べていられる。また更に吉井勇の歌集である「旅塵」中に出てくる佐渡の外海府での歌の中の萱草はまさにこれを指しているのであると断定されている。したがつて、男鹿にあつても不思議でない。なおハマカンゾウの学名は余が牧野先

生が予定された学名を植研 6 卷 (1929) p. 113 で公表したもので規約上この名はそのままでは無効で、後に中井博士が植雑 46 卷 (1932) p. 112 で (前出植研の巻数を 4 卷とされたのは誤) この名を引用してラテン文の記載をつけたときから効力を有することになるのだが、当時中井さんはこれを独立種としないで他のものの変種と考えられて変種としての簡単な記載をされた。その記相文は次のような短いものである、すなわち “Caulis robustus, zigzag-forme curvatus. Folia dilatata 3cm lata. Scapus axillari ramulos foliosos agit. Flores ut var. typica.” それだから、牧野先生の前掲 2 文の方がくわしい。しかし、先生の 2 つの文をよく見ると先生は独立したよい種だとかいていられながら、ノカンゾウによく似ているともかいていられながら、どこが違うのか具体的に指摘していない、文意から察すると芽枝を生ずる点にあるらしいが、其点を除いては花期にづれのあることが著しく、ハマカンゾウは前にも述べたように 8 月中旬から咲くことであると思う、これが種か種でないかについてはなお考えなければならぬが中井さんのように考えるよりもノカンゾウに結びつけたい気がする。ことに花蓋片に濃淡二通りの色彩が出沈する点なぞノカンゾウそのままである。



相州産ハマカンゾウ *Hemerocallis littorea* Makino.